



## お念仏とは

お念仏とは？ なぜ「南無阿彌陀仏、なむあみだぶつ」と声に出して称えるのだろう。誰もが人につられるようにお念仏を称えながらも、そう思うことがあると思います。

\* \* \*

古典落語に、横丁のご隠居がお仏壇に向かい朝夕お念仏を称えるのですが、そこに小言が混じる『小言念仏』という演目があります。

…なむあみだぶ、なむあみだぶ…、花が枯れてる、仏壇の掃除しときなさい。…なむあみだぶ、なむあみだぶ…、鍋が煮えたぎってるよ。…なむあみだぶ、なむあみだぶ…、お汁の実？タベの間になんで決めとかないの。表にドジョウ屋が通っているから呼んでみる。…なむあみだぶ、なむあみだぶ…、ドジョウ屋～、…なむあみだぶ、なむあみだぶ…、鍋の隙間から酒を入れるんだ。…なむあみだぶ、なむあみだぶ…、ドジョウ苦しがるだろ？…なむあみだぶ、なむあみだぶ…、静かになつたな、蓋開けて見る。…なむあみだぶ、なむあみだぶ…、みんな腹出して死んでる？…なむあみだぶ、なむあみだぶ…

この落語は、最初から最後までお念仏を称えながらあれこれ小言を言うご隠居の独り言です。落語だから当然ですが、笑ってしまいます。

私も声にこそ出しませんが、お経をあげながら、少しずつた仏具の位置が気になって直したくてしかたがなかったり、後で何を話そうかとお説教を考へたり、足の痺れに気持ちが入ってしまうこともあり雑念だらけです。何万回も聴き、自分も称えてきたお念仏ですが、一度たりとも邪心のないお念仏と言い切れる自信はありません。

\* \* \*

お念仏を考えるととき思い出されるのは父のお念仏です。父は浄土真宗の盛んな福井の流れをくむ寺から北海道の田舎の小さな開教寺院の二代目として養子に入った人でした。少なくとも息子の目には、豊かとは言えない寺の日に抗うこともなく淡々としており、だからといって悟っているようにも思えませんでした。朝夕欠かさなかったおつとめは、家族に強制することもなく、ひとりで淡々とつとめ終え、本堂から庫裏へ戻ってくる廊下で必ず歌うように「なまんだぶ、なまんだぶ」と口にするのです。

それは家族に聞かせるようでもありません。ありがたいとか、立派とか、そういうものでも

なく、そのお念仏を聞きながら一日が始動し始め、また終えていく。歌を口ずさむのも聞いたことがない、口数も少なかった父親から聞いた一番多い「ことば」が「なむあみだぶつ」だったなと懐かしく思い出される、私の好きなお念仏です。

\* \* \*

誰かの話し相手になるとき、相手の話に、“あ、そう”と相槌を打ち。相手が悩みを言う、そのとき“困ったね”と言う。相手が嬉しそうに話をする、そのとき、“よかったね”と言う。これ以上の言葉は必要がないと言われる。お念仏とはこうですよ…と、一言で解答するのは難しいことですが、お念仏は仏さまと私の日々の「やりとり」と言ってもいいでしょう。

阿彌陀仏はどんなお念仏であってもうれしく思って聞いて下さいます。そしていつも、“あ、そう”、“困ったね”、“よかったね”と、そのままの私を受け止め包んで下さいます。なぜなら、阿彌陀仏の誓い（願ひ）は、「すべての人にお念仏申す心を与え、その人びとをもれなく救う」という大慈悲心だからです。「もれなく」ですから条件はないのです。折々にお念仏を口にするたびに、また仏さまに私の心をそのままに聞いていただいたとお味わい下さい。

合掌

## 奏庵法座

日時  
6月26日(月)  
午前11時～

「真宗宗歌」

正信偈

法話

早島 理 師

龍谷大学大学院教授

滋賀医大名誉教授

北海道教区後志組大成寺住職

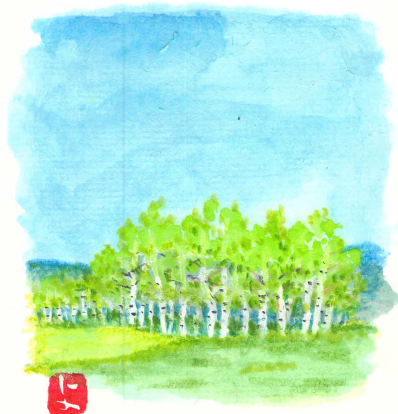
ご文章拝読

「恩徳讃」

～\*～

おとき

仏教では梅雨は、生命を育む動植物を踏みつけたりしないよう家にこもって学ぶ「安居」が行なわれてきました。奏庵の属する三浦組でも毎年この時季に「女性のための仏教法座」が開催され、今回の講師は早島先生です。日程がちょうど前後するので奏庵にもご縁をいただきます。どうぞ楽しみにお参り下さい。



となふれば

仏もわれも

なかりけり

南無阿弥陀仏

ナムアミダブツ

(一遍上人)

心に常に

仏を念ずれば

仏すなわち

これを知りたもう

(善導大師)

お念仏が

人間自身の闇を

見つめさせて

くれるのであります

(高史明)

聖教をひらくも

文字を見ず

ただ言葉の

ひびきをきく

(金子大榮)

## 訂正

度々メールが送信できないとのご指摘があり、ご迷惑をおかけしていること、お詫び申し上げます。

「かなである」の封筒に印刷されたメールアドレスは現在使われていません。

メールでのご連絡は、当紙面タイトル「かなである」下に掲載されているメールアドレス又 [kanadean@mac.com](mailto:kanadean@mac.com) にご送信いただきますようお願いいたします。

ひと月ほど前のニュースに、葬儀のあとの喪服で寿司屋に入って、居心地の悪さを感じながらも食事し支払いを済ませ外に出たら、店主の「塩を撒け！」とどなり声があったというものがあった。死を穢れとし忌み嫌う思想、それを「良識」だとする人が今だに多いことに驚く。■死はもとより、不幸とされる事態は、人格や行いに関係なく誰にでも訪れるものだ。一昔前までは、それらが暮らしの中にあつたから、悲しみ、苦しみ、そして喜びも、きちんと受け止める成熟した社会があつた。生死(人生)は、生まれ暮らしたその中で、助け合つて全うするものだから、自ずと情のある身の丈にあつたものになっていた。■今では当たり前になった斎場での葬儀や法事は時代になつたものだが、これが慣例となつたのはつい最近のこと。そこが「葬い専用」だから通る慣習を生んでいる。その一つが、着るものから細かい装飾品まで真っ黒というマナーで、考えてみれば一種異様とも言えるものだ。それは反対にネクタイを白く変えただけの式服にも言え、どちらも決して清々しいセンスとは思えない。■日本人の常識は、「こうした方が無難」程度から生まれている。今それは、葬式、結婚式、お墓、死に方でさえ、自分らしくとこだわり望みながら、吉凶や冠婚葬祭の禁句などはまことしやかに語られ、「死」を遠ざけるのが「礼儀」になってしまつていて、そのことが今触れ合っている人には様々の思いや状態があることへの配慮や寛容をなくしてしまつていてではないだろうか。■正しいマナーとは何をもって言うのだろうか。先日築地本願寺に参拝して思った。観光客が増えて外国人も多く、聞こえる言葉は様々だが、そこでのマナーは日本人観光客よりきちんとしている。着るものや形の作法ではなく、たとえ観光のついでであっても、そこは信仰の場であることに敬虔な気持ちで接することを忘れてはいけないものだ。参拝するとは、崇らぬようにとかご利益のためにするのはない。不幸というものを隠蔽しようとする文化には、真に清々しいマナーは育たないと思われた。Norimaru